

下町文化

第 183 号

平成 9 年 6 月 15 日

発行

江東区教育委員会
生涯学習部生涯学習課



蠣崎波響画 芭蕉坐像図

芭蕉記念館 新展示

◎芭蕉関係資料・芭蕉の肖像

◎貞徳とその門人たち

江東区芭蕉記念館（常盤1-6-3）では、6月7日（土）から新展示になりました。2階展示室右側の展示ケースでは「芭蕉関係資料」・「芭蕉の肖像」を取り上げ、左側の展示ケースでは、「貞徳とその門人たち」を企画しました。

今回は、「芭蕉の肖像」として蠣崎波響画松窓乙二賛の芭蕉坐像図を、初めて展示します。蠣崎波響は、江戸時代後期の松前藩士で画を円山応挙に学んだ画家です。画は芭蕉と弟子の其角と嵐雪の三人を描いています。

また、中央の展示ケースでは、「芭蕉と門人たちの本——蕉門俳人の著作と出版活動——」を引き続き展示します。

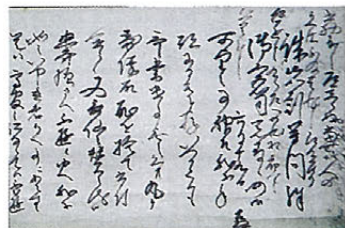
それでは、新展示の内容について、の細道（複製）も併せて展示します。紹介します。

「芭蕉関係資料」では、芭蕉37歳の吟で、蕉風の萌芽を感じさせる「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」の句短冊や「野ざらし紀行」の旅で詠まれた「辛崎の松は花より朧にて」句短冊などを展示します。また、昨年発見された、芭蕉自筆本の『おく

「芭蕉の肖像」では、本居宣長の賛がある良信画の芭蕉像や、実際には、唐に渡ったことのない芭蕉の渡唐の芭蕉像が、そして、冒頭に紹介した、波響画乙二賛の芭蕉像があります。

（2面へつづく）

たくみのやかた
「工匠館」第4回特別展 2面



「貞徳とその門人たち」の本人たちによる俳句の集り。その門人たちの著作物と出版活動も併せてご覧ください。

寛永1延宝
期(162
4)168
貞徳(1)に及ぶ
時期を主な
活動期とし

た、松永貞徳を祖とする、貞門俳壇の人々をとりあげました。

貞徳は、連歌から派生した「言い捨て」の俳諧を、「俳言」(和歌・連歌に用いない漢語・俗語・流行語)を使って作る連歌を俳諧と規定し、庶民文芸としての俳諧を確立させました。今回の展示は、芭蕉に俳諧の手ほどきをした、北村季吟や貞門七俳仙の立圃・梅盛、江戸五哲の徳元・末徳・玄札等の短冊や、書状を公開します。

また、引き続き、展示しています



立圃発句画賛

「芭蕉とその門人たちの本―蕉門俳人の著作物と出版活動―」も併せてご覧ください。

梅雨の晴れ間、小さな文学散歩の旅に出てみませんか。芭蕉記念館では、芭蕉と俳諧の世界に遊びましょう。近くには、職人の技を展示する「工匠館」(森下文化センター内)や、江戸情緒を満喫できる「深川江戸資料館」があります。路地を曲がると、そこは、あなたの知らない江戸の世界が広がっているかもしれません。

芭蕉記念館

開館時間：午前9時30分～午後5時
(芭蕉庵史跡展望庭園は、午前9時15分～午後4時30分)
休館日：月曜日(芭蕉庵史跡展望庭園は開園)
入場料：大人100円、小中学生50円
交通：森下駅下車 徒歩7分

「工匠館」第4回特別展開催

更染 さらさ

型染刷更紗 美弥好染工場
工匠番館では特別展「更染さらさ」展を開催します。区内で唯一、更紗染をおこなっている美弥好染工場は、平成元年3月に区の文化財として登録された貴重な伝統工芸技術を保持しています。

美弥好染工場は、初代佐野浜次郎氏から3代にわたって染色の技術を伝承してきました。現在地大島6丁目には2代「幸氏が「更染」を名乗って移転し、今日では利夫氏、勇氏、鈴木保氏の3人が伝統的な技法にもとづいた仕事を続けています。大島地区は、以前は多くの染織工場がありました。現在は「更染」美弥好染工場を残すのみです。

更紗染は、インド、ジャワなどを起源とする模様染布のことで、タイやスマトラ、中国、ヨーロッパ、日本などに広まり、木綿や絹の生地、手描きあるいは型紙をつかって人物や動植物、幾何学模様などを染めたものです。日本では17世紀から18世紀の近世初頭に輸入されたインド製



のものに倣い、それに日本人の嗜好を加えた「和更紗」が江戸時代後期から発達しました。

「更染」2代目佐野一幸氏は、古風な模様と色彩を用いて、エスニックな趣向を強調した作風を得意とし、「古代更紗」と称しました。最近では、伝統的な更紗の模様・色調に新しい解釈を加えて、洋服などを染めることもあるそうです。SARAS SEES(更紗の語源の一説。インド南部の古語)から更紗の世界へ、ぜひ足をこんでみてください。

期間 7月12日(金)～20日(日)
時間 午前9時～午後5時
(最終日20日は午後4時まで)
会場 工匠番館(森下文化センター内、森下3-12-17) 入場無料
問合せ 生涯学習課文化財係

☎3647-9111
(内) 3362

文化財保存のあり方

—富士信仰と富士塚(1)—

江東区文化財保護審議会委員

平野榮次先生

この記録は、昨年10月9日(水)に行われた講演要旨です。



「富士山」といえば、「三國一の山」「日本一の山」という言葉がすぐうかびます。古来より日本人は富士山の美しい姿を見て、そこに神がいる、あるいは富士山自体が神そのものであると信じてきました。江戸時代には、富士信仰を背景とした民衆宗教の一派である富士講が江戸を中心に広まりました。今日は富士信仰と江東区に伝えられた富士講関連の文化財についてお話ししたいと思います。

富士山は、古来、行者や修験者が修行の場としていました。一般の人たちが信仰登山するようになったのは、室町時代からです。戦国時代末には富士講の開祖といわれる角行藤仏が現れました。角行は富士山で厳しい修行を積み、修験道の思想に、神道、仏教、道教の神仙思想など、日本や中国古来の思想をおりこんで

独自の教義をつくりました。角行とその後継者たちは、加持祈禱によって病氣治癒を行い、江戸で信者を集めました。

江戸時代中期には村上光清の派と食行身縁の派に分かれ、それぞれ発展しました。

特に、食行身縁(伊藤伊兵衛)は富士講の中興の祖とされ、彼を「元祖」とする身縁派の富士講は幅広く信者を集めました。身縁はもとは伊勢商人として成功しましたが、富士信仰の道に進みました。その頃は將軍吉宗の治世で、幕府財政の赤字建て直しのため米価が高騰し、打ちこわしや暴動が頻繁に起こるなど政情が不安定になっていました。身縁は、皆がまじめに生活し「身を縁する(慎む、正しくする)」ことによって世の中は良くなると考え、富士山を信仰し道徳を実践することを説きました。さらに身縁は人々のために生命を捨てることを決心し、享保18年(1733)富士山七合五勺付近にこもり、31日目の7月13日に入定しました。身縁の思想と行動は人々の心をひきつけ、やがて身縁派は光清派を凌いで発展していきました。身縁の弟子には武士もいて、小泉文六郎、高田藤四郎、吉田平左衛門などの傑出した人物が出て、身縁の教えを世に広めました。

富士講ははじめ「同行」と呼ばれていましたが、宝暦(1751~64)頃から「富士講」の名称が一般的になりました。富士講の信仰面の指導者を「先達」といいます。「講元」は講の運営面・経済面の責任者です。「世話人」は講元の補佐をしました。「小先達」は先達を補

佐し「脇先達」ともいますが、独立して一つの講をつくることがありました。このように「親講」から分かれて「枝講」ができることで講はどんどん増え、しだいに「江戸八百八講」といわれるほどたくさん富士講が、江戸を中心として関東地方一帯に広がっていったのです。

たくさん講を区別するため、地名あるいは講の創立者(講祖)の名をとって「講印」(講紋)がつくられました。天保13年(1842)江戸鉄砲洲の長島泰行が江戸の由緒ある富士講一〇八講の講紋を曼陀羅にした「講中惣印図」(田端富士・三峰講所蔵)によると、江東区で成立して広がっていった富士講は九つありました。そのうち、丸不二講は本所亀戸で成立しており、それ以外の八つは深川で成立しています。丸不二講は亀戸浅間神社を修行の場とし、富士塚をつくりました。弘化2年(1845)の「富士講中惣印図」(船橋市湯浅氏所蔵)を見ると、成立は江東区以外で、江東区に枝講があった富士講が八つあります。その一つである山吉講は富賀岡八幡宮に富士塚をつくり、石碑を奉納しています。このように、江東区ではほぼ全域で富士講がさかんとなっていました。

富士講の行事は、まず、毎月集まり先達を中心にお



北口本宮富士浅間神社
(富士吉田市)

経を唱える「月拝み」があります。富士講の経典を「お伝え」といい、経文の内容が講によって少しずつ違うのが特色となっています。亀戸浅間神社には、富士講のお伝えが所蔵されています。これは、深川で成立した山高丸深講の先達の後継者が神社に奉納したものです。お伝えは各講が持っていました。ところが戦災等で失われてしまいました。そうした中で、戦争で大きな被害を受けた江東区にお伝えが残されていたことは、たいへんな幸運といえるでしょう。

また、毎年一回、先達を指導者として富士登山が行われました。富士講は必ず北側の吉田口から登ります。これは、身縁が吉田口から登山し入定したことになまみです。吉田の御師は富士講の登山者に宿坊を提供し、登山の道案内を勤めました。御師と講員は、師檀関係、つまり寺と檀家のような関係にありました。

月拝みの祭壇は「拝み簞笥」といいます。拝み簞笥は、引き出しが三段ほどの移動式の祭壇で、講員の間で持ち回りとなっていました。拝み簞笥に講紋を染め抜いた布を飾り、ろうそく立てや花立てを置きます。そして、祭壇の前でお伝えを唱えながら、富士山の形に積み上げた練香を焚いて「お焚き上げ」を行いました。新宿区の丸藤講では、現在でもお焚き上げを行っており、富士講の行事や祭具はだんだんと失われていっていますが、民衆の信仰の歴史を伝える貴重な文化財として、大切に残していきたいものです。

(次号へつづく)

おしらせ

深川探訪・資料館めぐり

深川の歴史と文化を訪ねて、深川江戸資料館、芭蕉記念館、工匠館（森下文化センター内）の3階をめぐるります。ふだんなら見る・読むだけの展示も、担当学芸員が親切に説明してくれます。参加費は無料。

日時 7月20日(日)午前10時～12時

集合 深川江戸資料館正面ホール

当日雨天の場合も決行

講師 横浜文孝(芭蕉記念館学芸員)

久柴健夫(深川江戸資料館学芸員)

定員 20人(応募多数の場合抽選)

締切 7月4日(金)

申込 往復はがきに住所・氏名・電話番号を明記のうえ左記へ

申込 問合先 生涯学習課文化財係

〒135 江東区東陽4-11-28

☎ 3647-9111(内)3362

深川体験わーるど

「深川」を様々な体験してもらうイベントを紹介します。

1 職人さん入門セミナー

伝統を今に受継ぐ職人さんに体験入門をします。

漆工(茶托・箸) 午前・午後各5人

更紗染(額絵) 各7人

木工(卓上額) 各9人

簾(のり巻簾) 各4人

江戸切子(皿) 各7人

※応募者多数の場合は抽選を行います。教材費は実費負担です。

締切 7月4日(金)

申込 往復はがきに住所・氏名・

〒135 江東区東陽4-11-28

☎ 3647-9111(内)3362

芭蕉記念館から

ジュニア俳句教室

日時 7月12日(土)

午前9時30分から11時30分

会場 芭蕉記念館2階研修室

対象 区内在住の小中学生

定員 30人(先着順)

集合 午前9時20分(筆記用具持参)

申込 7月11日までに電話で

第16回時雨忌(芭蕉忌)

全国俳句大会作品募集

投句 2句1組(時雨忌1句・雑詠1句) 未発表作品に限る。

何組でも可。200字詰原稿用紙(B5判)に楷書で、郵便番号、住所、電話番号、年齢、性別、氏名・俳号(各フリガナ)を明記のこと

投句料 2句1組1000円(切手不可、大会句集代及び送料)

締切 7月31日(木)必着

選者 有馬朗人氏ほか9人

発表 9月末日までに入賞者に直接通知

授賞式 10月12日(日)午後1時

会場・投句先 江東区芭蕉記念館

〒135 江東区常盤1-6-3

☎ (3631) 1448

☆類句・類想句・二重投稿(結社誌含む)については賞を取り消すことがあります。

工匠館から

伝統の技 実演公開

7月6日(日) 江戸切子 小林 英夫



*時間は午後1時～3時

旧大石家住宅から

旧大石家の七夕飾り

区立仙台堀川公園にある旧大石家住宅では、七夕飾りをおこないます。

〔展示期間〕 6月21日～7月6日

土・日・祝日のみ公開

〔開館時間〕 午前10時から午後4時

計報

江東区登録無形文化財(工芸技術・竹工) 保持者菅野銈太郎氏(94歳、富岡5-16-10)は、去る5月28日に逝去されました。慎んで追悼の意を表します。